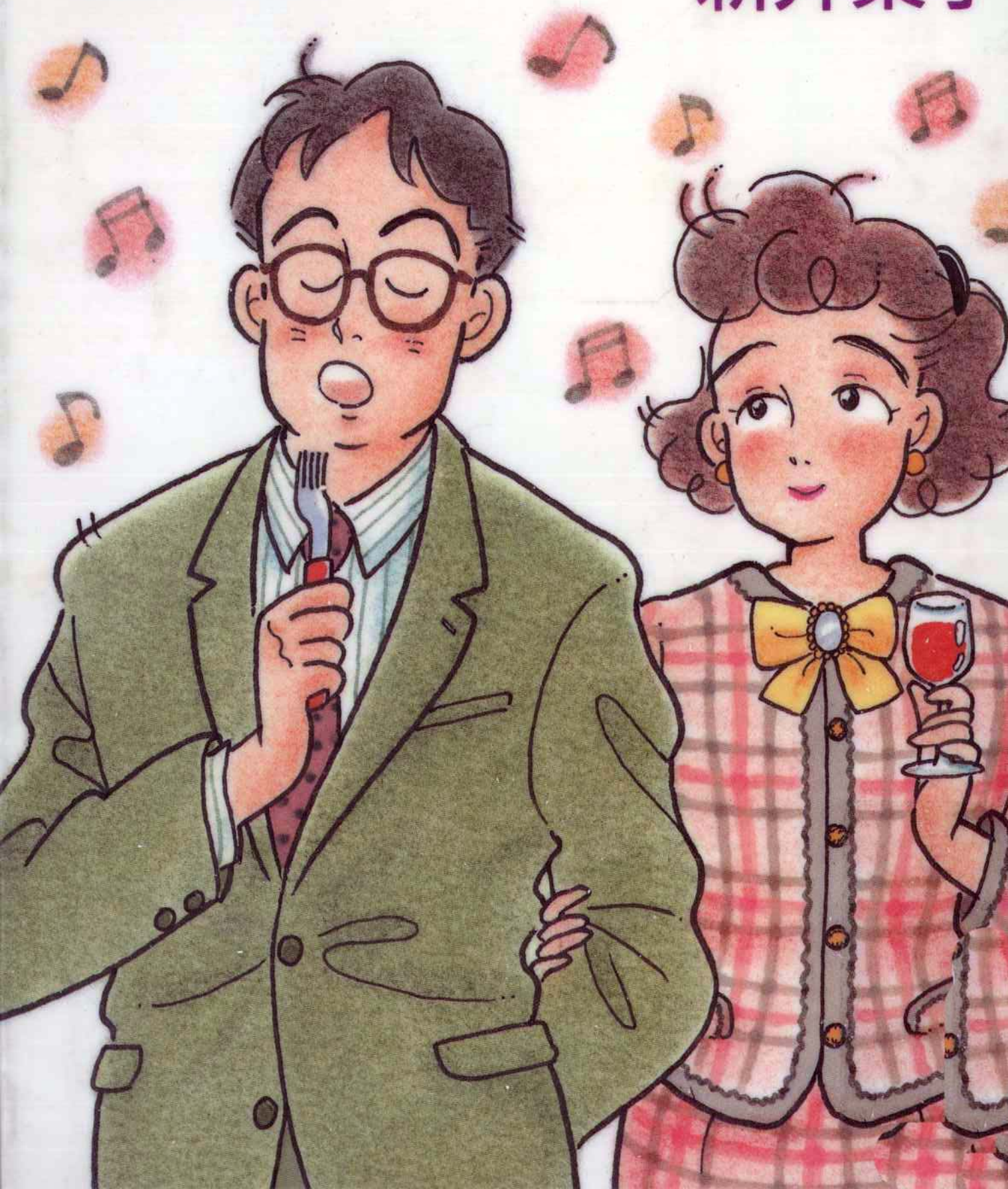
傍若無人な冷蔵庫

ぼうじゃくぶじん

新婚物語3

新井素子



傍若無人な冷蔵庫

新婚物語 3

新井素子

角川文庫 7261

昭和六十三年九月二十五日　初版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部(〇三)八一七—八四五一
営業部(〇三)八一七—八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——大日本印刷　製本所——多摩文庫
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
Printed in Japan

ISBN4-04-160007-3　C0193

傍若無人な冷蔵庫

新婚物語 3

新井素子

角川文庫 7261

目次

PART XII　傍若無人な冷蔵庫　五
PART XIII　ファージ、再び　四九
PART XIV　おばさん讃歌　九五
PART XV　二人だけのパーティ　一三八
PART XVI　タイニイ・バブルズ　一七六
あとがき　二二三

本文イラスト　さべあのま

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

PARTⅫ　傍若無人な冷蔵庫

「コーヒーと紅茶、あるいは玄米茶かウーロン茶、どれがいい？」
「じゃあ玄米茶もらえる？　ここリビング広くていいわねえ」
てんやわんやの引っ越しから約一週間たち、暦がいよいよ師走にはいった土曜日のこと。一応、ダンボール箱は全部あいたものの、まだまだ家の中はごたごたしている大島家の新居に、突然陽子さんの母親、光子さんが訪ねてきたのだ。で、慌てて光子さんをリビングへ通した陽子さん、これまた慌ててリビングの隣のキッチンにはいり、やかんを火にかけながら、大声をだしてリビングにいる光子さんと会話する。
「ちょっと待っててね、お湯わかすから。あ、適当にソファにかけてて」
「おまえ、朝起きた時にお湯もわかさないの？」
光子さん、主婦の先輩として、キッチンにいて姿の見えない陽子さんを軽く睨むような目つきをし、それから、興味津々といった趣で、新居の中をしげしげと眺めて。
「コーヒーはコーヒーメーカーでいれるし、うち、コーヒー以外にあったかいお茶はお客

さんがきた時しかのまないのよ。たーさんもあたしも、食事時は冬でも麦茶かつめたいウーロン茶だし」

「ま、家によって習慣が違ってもあたり前か。……こっちが和室？　はいってみていい？」

「どうぞ。で、和室みたら座ってよ」

「ちょっと待って。この障子のむこう、出窓になってるのね。あら、あの芝生、この家の庭？」

「そう。一応、うちの専有庭ってことになってる。使用料とられるけど。で、適当にソファか、さもなきゃ椅子に座ってよ」

「まあ待って。庭にはリビングのフランス窓からでられるようになってる訳ね？　……あ、一応サンダルがおいてあるか。……ちょっと庭にでるわよ。あら、物干し台、うちのと一緒なのね」

光子さん、どうやら今日は若い二人が買ったマンションを見定めに来たらしく、座って欲しいっていう陽子さんの意向を頭っから無視して、陽子さんの返事も待たず、目についたカーテンだの障子だのをかたっぱしからあけ、家の中を闊歩してゆく。で、母親とはいえ一応お客さんの光子さんが座ってくれないので、陽子さんとしても、落ち着いて座る訳にもいかず、しょうがない、光子さんのあとをくっついてリビングと庭の間をうろうろする羽目に陥

る。

「うん。最初っからついてたんだけど、偶然にも実家のと同じだったの。……ね、いい加減に座らない？」

「ふうん、芝は全面的にしきつめてある訳か。これじゃ、お花も植えられないわね」

「あ、別に、花植えたり何かするくらいなら、芝、植える処だけはがしてもいいって。実際、ちょっとシーズンがよくなったら、人参とトマトでも植えようと思って。今年はもう遅いけど、来年の秋は春菊とパセリも植えるつもり。……でさ、窓あけとくと寒いし、そろそろお湯もわくだろうし、ほんとにいい加減に座ってくれない？」

「おまえってほんとに色気のない娘ね。同じ植えるんなら、もうちょっとこう、娘らしい可愛いものを植えようって気にならないの？　パンジーとかプリムラとか、春になったらそりゃ奇麗よ」

「パンジーもプリムラも食べられない。それにトマトだって花は咲くし、春菊なんて名前からして菊だもの、菊の花が咲くわよ。……ね、寒いよ、中はいって座ってよ」

「どうせ花が咲く前に食べちゃうつもりの癖に。……大島のお義母さんは、園芸が御趣味なんでしょ、せっかくならお義母さんに教わってそういう優雅な趣味を身につければいいのに」

こんなことを言いながら、光子さん、いつの間にか、お隣との境の柵だの、外の道に面し

た扉だの、庭において検分したかったものをすべて見て、やっとこ家の中にはいってきてくれる。そして、そのあとをちょこちょこと陽子さん。

「お義母さんに教わったんだもん、春菊とパセリがいいって。あれなら、最初にちょっと石灰まいとけば、素人でも食べられるものが収穫できるって。あと、トマトは二年連続して同じ土壌で栽培しちゃ駄目だとか、いろいろ教わったわ」

「……おまえね」

光子さん、しみじみため息をつくと、やっとこソファに腰をおろして。で、やっと陽子さんもちょっとした安堵のため息をつくと、光子さんのむかいに腰をおろして、玄米茶をいれる用意を始める。

「どうせ、『食べられるものがいい』とか何とか言って教わったんでしょ？　ああ、ほんと、我が娘ながらなさけないっていうか、あちらのお義母さんがお可哀想だっていうか……」

「何よ」

「あちらは、男の子一人だけのおうちなのよ？　で、その、たった一人の男の子が結婚したのがおまえ」

「……うん。で、それが何か？」

「つまり、おまえは、義理とはいえ、あちらのお宅にとっては、たった一人の娘なのよ？

私だって、おまえと結婚したおかげで正彦さんっていう息子ができて、ああ、これからは何かあったら正彦さんを頼りにすればいいんだって思ってるんだもの、あちらだって、これからは娘ができたっていう、華やいだお気持ちでいらっしゃると思うのよ。で、その娘が、これから春を迎えるって季節に、庭のある家に引っ越した。園芸が趣味のお義母さんとしては、あれも作らせてみたい、これもいいんじゃないかしら、なんて、きっといろいろお考えになったと思うの。なのに、その、華やぎである処の娘が、娘らしく花を栽培することにまったく興味を示さないで、食べられるものをまず作りたがるだなんて……娘らしさ、娘をもった華やぎなんて、まるでないじゃない、野菜栽培には！」

「……今の意見って、農家の娘さんが聞いたら怒ると思う……」

「別にわたしは、野菜を作るのがいけないって言ってる訳じゃなくて……何ていうのかな、もうちょっと、うるおいがある……おまえにうるおいを期待しても無理か」

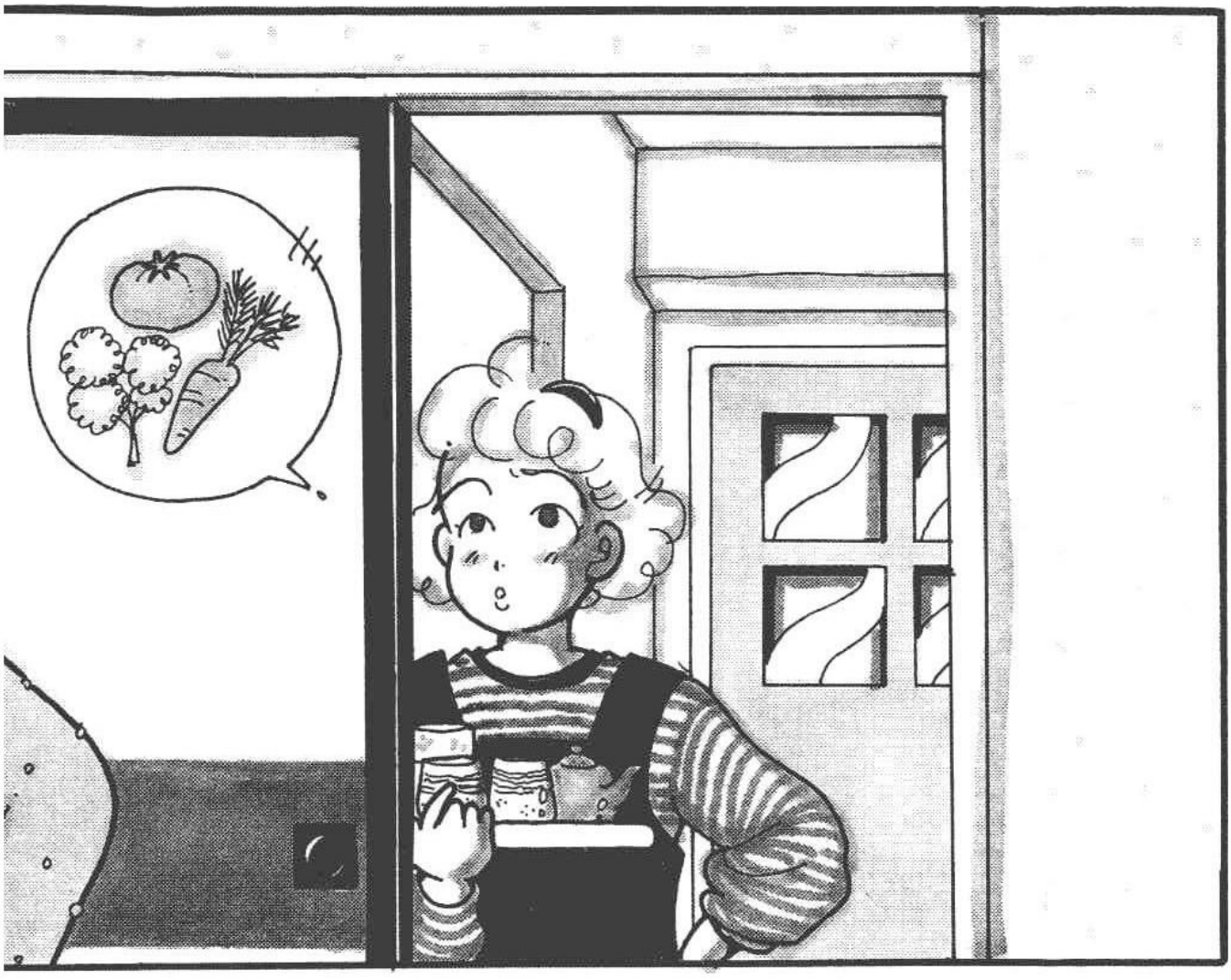
「無理よ」

「そうはっきりと言わないでくれる、たとえそれが事実でも。何だかわたし、自分の教育方針を根底から疑いたくなっちゃうから」

光子さん、こう言うと、もう一回深くため息をつく。で、それを見た陽子さん、何故か、何となく、しみじみとして。

「ま、その、おかーさんが、あたしとお義母さんの関係を心配してそう言ってくれるなら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



少なくとも、今の処、心配しないで。世間一般がどの程度の水準なのかは知らないけど、うちに関する限り、嫁・姑問題は、まだ発生してないわ。ま、それもこれも、お義母さんが、新夫婦のことは新夫婦に任せるって感じで、とっても遠慮してつきあって下さってるおかげだとは思うんだけど。それにあたし、お庭の問題で、結構お義母さんと親しくなれたと思うんだ」

「そう？　なら、いいんだけれど」

「うん。あちらのお義母さんって、園芸が趣味じゃない？　でも、大島家の男達は、たーさんもお義父さんも、全然そういう趣味がないんだって。だからその――たとえ、奇麗なお花じゃなくて、野菜とはいえ――あたしが、

お庭に興味を持ってるって知って、お義母さん、結構喜んでくれたみたい。ほんとに親身になって、野菜栽培についていろいろアドバイスしてくれたし」

「……ほんとに、そうなら、いいんだけれど……何たって、おまえはがさつでその上おっちょこちょいでどうしようもない粗忽者じゃない？　いろいろ、あちら様の神経に触るようなこともしてるだろうし……」

「ま、あたしだってわざとがさつにしてたりおっちょこちょいやってたり粗忽者だったりする訳じゃない、真剣に、悪意なんてこれっぽっちもなくて、がさつでおっちょこちょいで粗忽なんだから、それってしょうがなくな

い？」

「悪意の有無なんて問題じゃなくて、がさつだったり粗忽だったりすること、それ自体が問題なんだけどねえ……」

光子さん、こういいながら、陽子さんがいれた玄米茶を一口飲み、陽子さんはそんな光子さんの様子を見て、自分の玄米茶にちょっと手をだしかけて、それから一回ため息をつく。

「ま……ねえ……確かに結婚祝いで貰ったコップなんか、もう十二個も殉職してるしなあ……その辺に一抹の問題意識は、あたしだって抱かない訳じゃないんだけれど……」

「え？　じゅんしょく？　コップがじゅんしょくって……コップに潤色なんかしてどうするの」

「字が違う、字が。コップに潤色するんじゃない、コップが殉職したのよ」

「コップが潤色したって……コップが何を潤色するっていうの」

「だから、字が違うんだって。コップは、自らの職業に殉じたのよ」

「コップが……自らの職業に殉ずるって……あの、陽子、それってつまり……」

「最初はね、あたしが洗いものをしてた時にお亡くなりになったコップは、『業務上過失致死』であたしが殺したって言ってたのよね。でも、そうすると、どうも、あたし、『業務上過失致死』ばっかりやってるんで、最近では、お亡くなりになったコップについては、主語を『あたし』から『コップ』に置き換えて、『コップが殉職した』って言い方にしてんの。

ね、この方が、表現がおだやかじゃない」
「……おだやかも何もね、そういうのは、まっとうな日本語では、『おまえが業務上過失致死を犯した』んでも『コップが殉職した』んでもない、『おまえがコップを割った』って言うんです！　……ほんとにもう……それで、何、結婚以来、もう十二個もコップ割ってるの」
「ま、それだけちゃんと家事をやってるんだって評価してちょうだい。コップだって、別に、洗いものしなきゃ割れないんだから」
「わたしはもう三十何年家事をやってますけどね、まだ十二個もコップを割ってないと思うわ」
「まあまあ、その、人間には向き不向きってものがあるし、あたしの方がまだおかーさんにくらべれば料理に向いているっていえるし」
「でも、掃除も洗濯もアイロンかけも食事の後片づけも繕い物も縫い物も、その他すべて、調理以外の家事は、全部、おまえに向いてないじゃないの」
「まあまあその……おせんべ、食べる？」
陽子さん、何となしに後ずさり、食器棚の下の段から、引っ越す直前にもらった煎餅の箱をひっぱりだす。
「おまえね、おせんべなんて――あ、海苔がついている方がいいわ、ざらめがついてるの

は虫歯に悪そうだから――そういう問題じゃないでしょう」
「とか何とかいいながら、おせんべの種類は注文してる癖に」
「じゃ、ざらめのでもいいわよ、とにかく問題は、おまえが粗忽でありがさつだってことで」
「そして、問題は、そういうのって、今更注意してもほとんどどうしようもないことだってことで」
「……ま、そりゃ、そうなのよね。しょうがないことで悩んでも、確かにしょうがない訳で……ここはもう、しょうがないって笑って済ますしかないのかしらねえ」
「そう。しょうがないのよ。笑って済まそ」
「じゃ、海苔の方、頂戴」
それから、この極めて楽天家の親子・光子さんと陽子さんは、どちらからともなく視線をからませて、苦笑いを浮かべる。
「ま……その……」
光子さん、軽く肩をすくめて。
「ある意味で、おまえと結婚した正彦さんは可哀想だとは思うけど……でも、それだって、しょうがないわよねえ。別に誰が強制した訳でもないのに、正彦さんがおまえと結婚したいって言ったんだから。それに、おまえの家事能力って、結婚する前と今とで、何ら変化して

ないんだから」

「あ、独身の時に比べれば、まだ、今の方がましになってる」

「なら、余計、しょうがないわよねえ……。あちらの御両親にしてみれば、災難だったろうけど」

「あ、大丈夫よ、おかーさん、それは。こっちが悪意を持って粗忽やがさつやってるんでない以上、あちらの御両親も、ため息ついたり内心あきれかえったりすることはあっても、それをもとにあたしに悪意を抱いたりしないから」

「どうしてそんなこと言えるの」

「だって、たーさんって、あたしが好きだってことをおいといて客観的に見ても、いい人じゃない。きっと子供の頃は素直ないい子だったんだろうって、あたし、思う」

「まあ、それはそうね」

「なら、たーさんをそんないい子に育てたんだもん、あちらの御両親はいい人に決まってるじゃない。いい人はね、こっちが悪意を持ってない以上、絶対こっちに悪意を持ったりしないもんよ、普通」

「そ……そう短絡できるものなの？」

「そうよ、絶対。いい人が育つってことは、環境がいいに決まってるんだから」

「ま……それもそうね。確かにおまえは粗忽者だけど、親がこーんなにいい人なもんだか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com